

高等学校

地元の憩いを取り戻す

宮城県農業高等学校

三年 村上 善春

「いつてきますー!」

毎日当たり前のように港町の棧橋に向かい、野々島に登校するための揺れる船に乗り込む。船は渡辺採種場が仙台白菜の種取りに使った馬放島を通り過ぎ、野々島に向かう。私は登校の度、馬放島を眺めて安らぎ、野々島にある菜の花畑の明るい黄色に元気をもらっていた。

中学一年生の三月、二つ上の先輩の卒業式の日、いつも通り棧橋に向かい、野々島からの帰りの船上で、あの地震が起きた。船は激しく揺られ、なんと避難した。あの綺麗だった菜の花畑、友達と放課後に集まった公園、大好きな駄菓子屋が……。

私の目の前には残酷な光景が流れた。

幸い、学校は高台のため無事で、震災後も登校が出来た。しかし、港町の棧橋も島々の砂浜もたくさん流木が、私の大好きだった景色を邪魔している。中学生だった私は、その景色を眺めるだけの自分に腹がたつた。

「ぐずぐずしてられない。すぐにでも何かしたい!でも何をすれば……。」気持ちばかり前に出て行動には移せなかった。

中学三年生になり、教頭先生に

「おまえに頼みたいことがあるんだ。」

と呼び出された。はじめは訳も分からず、木をひたすら削る作業だった。湿って重くなった木をひ

たすら削り続けた。汗だくになりながら、その重い木を運んでくる教頭先生に何に使う物なのか聞いてみると、

「これは島の海岸に流れ着いた廃材だよ。これを使つてベンチを作るんだ。」

と教えてくれた。

そのとき、教頭先生の島の復興を目指す熱い気持ちを感じとり、自ら積極的に流木集めから手伝うようになった。海岸の流木が片付くと、島の観光物産でもあり、毎年学校行事でも行っていたアサリ取りも、海岸沿いで海女さんがとってきてくれる牡蠣むきも復活する!そして、自分が作ったベンチをたくさん置いてあげて、島の人はもちろん観光者も腰を下ろしてゆつくり島を楽しんでもらうんだ!震災の影響で島には活気がなくなつたが、島のために今自分が出れることはこれだ!

それからは住民の方々もこの流木拾いやベンチ作りに参加し、島だけではなく私の港町も少しずつではあるが片付き始めた。

「まだまだ!まだ自分に出れることがあるはずだ!」

私は登校する度にゴミ袋を持って登校し、行き帰りで拾える限りのゴミや瓦礫を拾い始めた。また、わたしの中学校では、生徒全員参加の演劇発表会がある。私の代の題目は「仙台白菜始め」。これは渡辺採種場の創設者である渡辺顕二さんが仙台白菜の種取りのために、数え切れない失敗を繰り返しながらも、あきらめずに研究を続け、馬放島で多種との交雑を避け仙台白菜の種を完成させたと言う話である。私はこの演劇の主役を務めさせてもらうことになり、学校みんなにも、島

のみんなにも、「私は絶対にあきらめない!」と

いうメッセージを伝えようと、演じきつた。「誰かのために、地元のために何かをしたい!」この強い気持ちを続け、その志を持った人たちが集まると、こんなにも思いが伝わり、行動に移せるものだと学んだ。このことを自分の後輩にも伝え登校時のゴミ拾いなどの、今自分たちが島のために出来ることがある、それをやっつけようという気持ちが継がれている。

私はこの『地元をもっと活気づけたい。』という気持ちを決して失わない。そして今宮城県農業高等学校で農業について学び、東京農業大学厚木キャンパス農学部畜産学科進学を目指し日々の勉強はもちろん、実習科目も畜産部門を選択し出来る限り家畜と向き合う時間を作り、先生方と丁寧な世話に努めている。

一度地元を離れても、広い世界で様々な人と出会い、進学先で同じ志を持った人と、いつか地元に戻り独自のブランド豚の飼育を行うファームを立ち上げ、島オリジナルのベーコン作りといった、六次産業化の夢を実現させる。

今日も私は、今自分に出れることを探し、一歩ずつ前進する。手作りのベンチに座って澄んだ潮風をまた気持ちよく浴びるために。

『私のしごと』作文コンクール第十回大会(特定非営利活動法人仕事への架け橋主催)全国高等学校長協会会長賞受賞作品

伝えたいこと

宮城県志津川高等学校

三年 千葉 水晶

五年前の三月十一日、当時中学生だった私は学校にいた。高台の学校だったために避難所となり、私自身も家族を迎えに来てくれるまでの時間をそこで過ごした。停電と断水、夕飯にと与えられたものはキャラメル一粒。雪が降る寒い中、新聞紙で必死に暖をとった。当然初めての経験だった私は、言い知れぬ不安と恐怖に一晚中眠れなかったことを憶えている。家族は全員無事だったが、自宅は一階が海水に浸った。家族全員で掃除をして、再び住むことになったが、窓から覗いて見える景色は悲惨なものだった。自分達の他には誰もいない、瓦礫まみれの中で静かに生活していた。一日がとても長く感じられ、この暮らしがいつまで続くのだろうという不安の恐怖が拭かれることはなかった。

しかし、この東日本大震災を経て、私は自身自身が大きく変わったことを実感している。以前はやるべき事を面倒くさがって後回しにしてしまう事が常だったのだが、震災で「いつ何が起こるか分からない」ということを学んだからは、まず先にやるべき事を片付けるようになった。すると、今まで自由奔放な性格だった私に、自然と責任感が生まれてきたのだ。私は当時吹奏楽部に入学していたのだが、思うように音を奏でられない時は、やけになって放り出すことが少なからずあった。だが震災後、意識改革が起こってからは部

活を休まなくなっただけでなく、自分が奏でる楽器のパートに責任を持って日々練習をかかさないうようになった。震災後、たくさんのプロの音楽家の方々が演奏を聴かせに来てくださり、生の音楽に触れることができたことも、私自身の大きな変化に繋がっていたのだと思っている。プロの音楽家の方々は、単純に奏でるのが上手いだけではなく、音に言葉では表せない感情を乗せて私にメッセージを届けてくれた。震災の悲惨さとは対照的に軽やかなメロディーで、力強く「前に進んで」と。このメッセージを受け取ることができたからこそ、私は前向きに、震災で得た教訓「いつ何が起こるか分からない」にならって生きることができているのだと考えている。

現在高校三年生になった私は、高校生活で部活動や委員会活動、生徒会活動を最後までやり遂げることができた。それは私一人の力などではなく、家族や友人、何より支援してくださった方々が私に力も与えてくださったからである。私は高校では軽音楽部に所属している。震災後にプロの音楽家の方々から学んだ「音楽で感情を伝える」ということを、私なりに表現できたのが軽音楽だったからだ。この四年間で震災を通じて出会った方々全員に、私の演奏で恩返しができて嬉しい。今年の六月、私は二年後に建設される予定の新庁舎に導入される、「町民のためのフリースペース」についてのワークショップに参加した。これは今の町で不便に感じるところを補うという試みで、利用者である町民が中心となって意見を出し合うものだった。私のような高校生から年配の方々まで一堂に会し話し合ったのは、今回が初めてだった。このように町についての意見を町民の

方々と話す機会ができたのは、言い方は不謹慎かもしれないが、東日本大震災のおかげだと私は考える。今の町民は皆同じ悲しみを経験しているが故に、町民同士の絆がとても強い。それは震災が起きなければ得られなかった結びつきだろう。この絆は、町が復興した後も失われることはなく、むしろ更に強くなっていくって欲しい。町の過疎化が進んでいるからこそ、町民全員が円滑な人間関係を築き、平和に生活して欲しいと考えている。

私は高校卒業後、地元を離れて就職する予定だ。理由はいくつかあるのだが、一番大きな理由は震災のことを町の外に広めていきたいからだ。当時自分が体験した出来事や、震災を通じて出会った方々、自分の心境の変化、そして今現在の被災地の様子。現地の状況を知らない人々に、私が情報を発信してきたと考えている。そして町の外で一人前に成長し、いつかまたこの町に帰ってきた



宮城県宮城野高等学校
三年 阿部 汐夏

私の夢「集いの場〜市民農園」

宮城県南郷高等学校

三年 奥田 彩生莉

私は、東京農業大学の学生ボランティアの方々との交流がきっかけで「農業をやりたい。」と思うようになりました。学生ボランティアの方々は、私が住んでいる東松島市の仮設住宅に四年前から二ヶ月に一回、支援に来ていました。駐車場を畑に変える大工事から始まり、野菜作りを通じてたくさん交流イベントを企画してくれました。私にとつて、継続的な活動と学生の方々の明るさから元気をもらえたボランティアでした。そんなボランティアが今年の三月をもって終わってしまいました。仮設のほとんどの人が「終わってしまうことが残念だ。」と学生の方々の別れを惜しんでいました。

最後に行われた活動報告会で、「私も、こんなボランティアがしたい。畑での活動がなくなってしまうなら、私が学校の仲間と畑の管理を引き継ぎます。これまで通り活動を行っていきましよう。」

とみなさんの前で約束しました。

仮設住宅では現在、復興住宅への住人移転が進み、自治会の解散が進んでいます。これまでのような支援も無くなってきています。しかし、依然として仮設での生活を余儀なくされている方もいます。私は、そのような方を元気づけたい、楽しんで行っていた活動を継続したいと考えました。

新年度が始まり、南郷高校による月に一回のボランティアが始まりました。

一回目は五月八日に決定し、内容は主に自己紹介とお茶会でした。当日は、十五人の住人の方々が参加してくれました。話すことが苦手なメンバー、

緊張していた私達に

「何年生？」

「進路はどうするの？」

住人の方がたくさん話しかけてくれました。会話をしていく中で緊張がほぐれ、自然体で話ができるようになりました。

二回目は、いよいよ畑での活動です。野菜の苗をみんなで植え付けました。学生ボランティアの方々が応援に来ていただき心強く感じました。ところが、活動では住人の方の質問攻めに答えられなくて、勉強不足だねと笑われる場面があり、最初は私達が主導で行っていましたが、いつの間にか私達が逆に教わる立場になっていました。しかし、この活動がきっかけとなり、住人の方との距離が一気に縮まりました。

「月一回とは言わず、また来週きてよ。」

という言葉をいただいた時、この活動を行って本当に良かったと思ひ、自信がみなぎりました。

私は、この花や野菜の手入れをするボランティアを通じて、交流が生まれ、笑顔が生まれることに気づきました。交流によって元気になるだけでなく、コミュニティの絆が強くなるものだと確信しました。

八月には夏祭りを行いました。移転された方々や、東京農業大学の学生ボランティアの方々を招待して行う大イベントでした。企業にも声をかけ、生協と農協にも参加していただきました。たくさんの方が笑顔で楽しんでいて、私にとって一生忘れられない思い出になりました。

活動中、住人の方々のたくさんの想いを聞くことができました。その中でも印象に残っている声があります。

一つ目は、「震災で畑がなくなってしまうたら、再び畑仕事ができなくて嬉しい。」という声です。二つ目は、「仮設がなくなったら、もう一度集まれる

場所がなくなってしまう。」という声です。私が住んでいる仮設住宅の矢本グリーンタウンは、市のような地区から人が集まってできたコミュニティです。したがって、移転する先もバラバラになってしまいます。だからこそ、これまで一緒に過ごしてきた絆をいつまでも継続したいという強い思いがあることがわかりました。

「将来はお花屋さんになりたい。」と思っていた私は、住人の方々の想いに使命を感じ、私の夢はより大きな夢になりました。

「みんなが集まれる場所、市民農園を作りたい。」市民農園は、気軽に集まれる場所となり、多くの人交流する事で絆を深め、地域の方々の心の支えになると考えました。

私の生まれ育った東松島市野蒜・宮戸地区には、災害危険区域と耕作放棄地があわせて三百ヘクタールあります。そのほとんどが今後の活用の計画がありません。ここに市民農園を作りたいと考えようになりました。そこで、私の思いを市の農林水産課の担当の方に伝えたところ、農地であれば貸し出す事は可能であると教えていただきました。また、災害危険区域で作物を栽培している「アグリードなるせ」の佐々木さんにお話を伺ったところ、「野蒜地区は津波で作土層がなくなっている。下地は砂浜だから最悪だ。しかし、盛土をしてしっかりと土作りすれば作物は作れる。地域の復興に向かって頑張ろう。」

と励ましの言葉をいただきました。

今は寂しい奥松島ですが、市民農園を作る事によって人が集まり、新しい出会いや集いの場として再び活気ある場所にしたいです。菜園とイベントができる休憩施設、子供達が遊べる公園、将来的には直売所や私の小さな花屋も作りたいです。私の夢は、市民農園の実現を手がかりに魅力ある地域の再生をめざすことです。

バレーボールと私

宮城県石巻商業高等学校

三年 牧野 陽紗

小学二年の夏、私は胸より長かった髪をばさりと切り、コートに立ちました。それから今まで十年間というものの、私はネットの高さと闘い続けることとなったのです。

私がバレーを始めたのは、父がスポーツ少年団のバレーボールチームの監督だったからです。きつい練習にすぐに投げ出したくなった私が続けられたのは、父が監督だったので辞められなかったのと、母の励ましがあつたからでした。一年、二年と続けていくうちに上達し、バレーボールの楽しさも分かるようになりました。同時に、どのチームメイトよりもたくさん怒られました。泣き虫だった私は、泣きながらボールを追いかけて、いつの間にかチームの中心選手になっていきました。だから、少年団の大会のたびに監督が決める優秀選手賞は自分だと、いつも期待していました。それなのに、名前を呼ばれるのはいつも他の人です。ようやく私が優秀選手賞をもらえたのは、引退試合の時です。最後まで優秀選手賞をもらえないで終わるのだと諦めていた私は、

「陽紗のプレーが一番良かったから。」

と監督にみんなの前で言われました。初めて父から認められて、私は涙が溢れました。

中学校に入って、迷わずバレーボール部を選んだのは、この経験があつたからです。一年生からセンターで活躍することができました。バレーボール選手としても波に乗り、勉強でも何でも学校生活が楽しく、充実していました。私はとても幸

せでした。そしてその幸せが永遠に続くと思っていたのです。

一年生の終わり、三年生の卒業式のことでした。大地がうねるような地鳴りがして、私は急いで祖父母と高台に逃げました。そこからは、黒い波が押し寄せてくるのが見えました。ちょうど小学校から避難してきた第二人とも合流でき、もつと高台にある避難所へ向かいました。それから先は何も見なかったもので、避難所でも心配や不安はなく、明日になれば帰れるだろうと思つて一夜を過ごしました。翌日、私と弟は祖父母に外に呼ばれました。祖父は私の手を握り、ゆっくりと息を吸つて、「お母さんがだめだった。」

と言いました。すぐ下の弟は、何が起つたかが分かると、自分が泣いてはだめだと思い、必死で涙をこらえたようですが、私と一番下の弟は泣きじゃくつてしまいました。今まで、私のバレーボールを一番応援してくれた母、優秀選手賞をもらえず、何度か辞めたいと相談した私に、「ここで辞めることが、一番かつこ悪いんじゃない。」と、いつも支えてくれた母、その母を突然失つてしまった私は、これから先どうしていいか全く分かりませんでした。

数日たつて、行方不明だった父が生きているという知らせが届きました。父は津波にのまれ、骨折しましたが、幸い病院に収容されていました。父と再会した時、父は泣いていました。私たちが生きていたという嬉し涙と愛する人を失つたという悲しみの涙でした。それは、私が見た初めての父の涙でした。いつも厳しく怖い存在だった父を、今度は私が支えなくてはいけないと思いました。その時から私は悲しみに下を向くのをやめました。強く生きようと決意したのです。

やがて、高校に入学した私は、一つの転機を迎

えていました。何かあつても続けてきたバレーボールではなく、自由を選択したのです。しかし、三ヶ月間、バレーボールから離れてみて、自分がどんなにバレーボールが好きなのか分かりました。それからというもの、私の高校生活はバレーボールとともにありました。バレーボールと真剣に向き合うようになってからは毎日が充実していました。

あつという間に、三年生の最後の大会になっていました。コートに立ち、応援席を見ました。父が応援に来てくれました。いつもは照れくさいのか、応援に来ない二人の弟も来ていました。しかし、母の姿はありません。小・中学校の時は、仕事が忙しくて、疲れていても、応援に来てくれていた母の姿が、今はもうないのです。試合中は、必死にボールを追いかけていたせい、あつという間に終わつたような気がします。走つても届きそうにないボールを追いかけている時は、母が背中を押してくれていたように思われます。不思議と体が届いて、ボールをつなぐことができました。試合終了のホイッスルがコートの上に長く響いたとき、私はやり遂げた気持ちでいっぱいでした。

もうじき、高校も卒業です。私は全体の専門学校に進学します。将来は接骨院で働き、故障に苦しむスポーツ選手を支えたいと思つています。そして、父のようなバレーボールの指導者になりたいという夢もあります。母のように励まして、子どもたちに夢と頑張り甲斐を与えられる人になりたいとも思います。

その夢に向かう前に、私は父と母に心から「ありがとう」と言いたいと思います。

誰かのために

宮城県中新田高等学校

二年 森田 菜緒

大きく揺れる大地、街ごと全てを飲み込む津波。それは、二〇一一年三月十一日の出来事。何度も揺れる地面や電線に恐怖を感じた。懐中電灯や口ウソクの光を家族で囲んだ。大きな余震に何度も起こされ眠れなかった。電気が復旧してからテレビで見た、車も建物も木も全てが流されていく映像。あの頃のこと、思い出そうとしなくとも、ふとした瞬間に思い出される。出来事や自分の感情が脳裏に浮かぶ。

私が住んでいる町は、地震の揺れは大きかったものの、被害は比較的少ない方だった。海はないため、津波の被害には遭わなかったし、建物の倒壊も少数だった。自宅も無事だった。しかし、車で少し行った所にある町や、親しみのある町が、大きな被害に遭っている。そう考えると、「私の町は……」と安心する反面、「あの町は……」と不安になった。新聞で読んだ記事やテレビで見た映像は、今も頭の中で再生される。

震災から三ヶ月後の六月。私は中学校の部活動仲間と募金活動を行った。これは、保護者の方々からの提案で、被災した沿岸部の中学校で同じ部活動をしている仲間達へ送る義援金を集める活動だった。私は、自分の力で手助けができることがとても嬉しかった。少しでも被災した人々の力になりたかった。だから私は、活動をするにあたっての準備から義援金を送るまでの全てのことを全

力で行った。

「募金をお願いします！」

という私達の声に足を止め、募金してくださる人々に感謝の気持ち伝えると、

「少しでも力になれば良いと思って。」

と言ってくくださる人や、

「あなた達も頑張ってるね。」

と応援してくくださる人が沢山いた。私のように、少しでも被災した方々の力になりたいと思う人が沢山いることに気が付いた。そして、その思いを自身の行動に直接繋げることは簡単ではないのだと思つた。私達がこうして、募金活動を行ったことで、「力になりたい」と思う人々が間接的にでも被災地の力になることができていた。沢山の金からの募金で重くなった募金箱の中には、お金だけではなく人々の想いもぎっしり詰まっていた。

集まった義援金と想いは、数校の中学校に送つた。相手の中学校からは、お礼の手紙や色紙が届いた。沢山の感謝の言葉が並べられた色紙を読むと、心が温かくなったことを覚えている。一つ一つの言葉に嬉しくなり、募金活動をしてよかったと、とても強く思つた。

震災があり、それがきっかけで募金活動をするまでは、積極的に誰かのために行動することは少なかった。人を助けたいとは思つても、それを上手く行動に移す勇気がなかったからだ。だが、募金活動を行ったことで、私は大きく変わった。誰かのためになることを積極的に行うようになった。自分が直接人のためになることに関わることができると、自分が「誰かのために」と動く

と、それに合わせて共に動く人が増える。そうしてやっとな誰かのために役立った時、初めて自分の中に喜びが生まれる。人の喜ぶ顔を見ることができる。これらを初めて感じたのは、あの時の募金活動だった。募金活動をあの時に行つていなければ、きっと私は震災前と変わらない、行動できない人間だったろう。部活動で募金活動を行った後も、中学校の委員会の活動の一環として被災地へ送るための義援金を募る活動をするなど、様々なことを行った。どの活動も、大人の方の補助がありながらの活動だった。私は、来春から社会人として働くようになる。二年後には成人式を迎える。今までは、学生としての活動であり、大人の方の手を借りながら行ってきたことだった。次は、私が学生たちに手を貸す番になりたいと思つている。誰かのために役立つことに直接関わりながら、「役立ちたい」と思う学生や人々と共に活動していくことが私の目標である。震災を体験し、様々な活動を行ったからこそ生まれた、私の「役立つ」ことの想いを無駄にしないように生きていきたい。私を成長させてくれた、あの出来事と自分自身の活動を忘れないでおこう。

私の中の大地震

宮城県気仙沼向洋高等学校

三年 藤田 海音

震災当時、私は中学一年生でした。それは、明日に控えた卒業式の準備を終え、友達と下校していたときのことです。近くを歩いていた生徒が、突然騒ぎ始めました。後に津波によって甚大な被害を及ぼした、東北地方太平洋沖地震が発生したのです。学校の放送の指示により、私は一緒に帰っていた友達と共に、学校へ一時避難しました。校庭にはすでにたくさんのお友達や地域の方々が避難して、みんな異常な出来事に落ち着かない様子でした。私たちも同じで、これまでに経験したことのない揺れにパニックになっていました。

すると、津波がこちらに向かっていくという情報が入り、校庭には危険なということ、生徒と地域住民は校内へ避難するように指示されました。学校に入ろうとしたとき、一部の女子生徒が悲鳴をあげました。悲鳴を上げた生徒の方を見ると、遠くからこちらに津波が押し寄せてくるのが見えました。木々がなぎ倒され、土煙が激しく上がっていました。これまで、私たちの地域では頻繁に大きな地震が起こり、今回の揺れもたいして被害は大きくないと思っていました。生まれて初めて見た津波に、事態の異常さを思いました。

そして夜になり、母が迎えに来ました。やっと家に帰れると一安心しました。母の車が自宅とは反対方向に向かったので、母はどこに向かうのかと私が尋ねると、親戚の家だと言われました。私の自宅は津波の被害に遭い、とても帰れる状況ではなく、しばらくは家に帰れない、そう言われました。

一つ、気になることがありました。離れて暮らす母方の祖母のことです。祖母はとても用心深く、少し大きな地震が起きると、津波注意報さえ発令されていなくても、内陸の親戚の家まで避難してきます。その点では、祖母のことを信頼していました。しかし、いつまで経っても、祖母との連絡はとれません。私の家族はみんな、嫌な予感がしていました。震災から二日経った頃、母は祖母を連絡して探すのではなく、遺体安置所を回って探すことにしました。すると間もなく、近くの小学校の体育館で、祖母が見つかりました。母は落ち着いた面持ちで私に伝えてくれました。一方、祖父の方はなかなか見つかりません。ついには、祖父の遺体がないまま、祖母の葬儀が執り行われました。祖母の火葬の時、初めて遺体を見たのですが、顔は信じられないほどに黒と緑に変色していて、知っている祖母の顔を見る影もありませんでした。それに息ができないほどの異臭がともない、とても見ていられる状況ではありませんでした。私は、この時に初めて祖母の死を実感しました。

震災から半年が経とうとした頃、一本の電話が母に入りました。なぜ私の母に連絡が来たのかは覚えてはいませんが、たしかに個人的に連絡が来ていました。電話の内容は、宮城県沖八十キロメートルで一人の遺体が見つかったのを漁師が見つけた、とのこと。母は、その遺体を確認しに行きました。そして、これは母から聞いた話なのですが、その遺体は水を大量に吸っていて、顔がわからなくなっていたそうです。本当に祖父か確認するためにDNA鑑定を行うことにしたそうです。そしてDNA鑑定の結果がでたのは検査から一ヶ月を過ぎたあたりでした。結果は九九・九%で母と親子だという結果が出ました。祖父は、宮城県の遠い沖の方でたまたま浮いていたのをたまたま漁師の

方が見つけてくれたことによって発見されたので、私たちは奇跡だと思いました。親戚が「早く見つけでほしかったんだな。」と涙ながらに言っていたのを聞いて、私は祖父はまだ死んでいないのではという錯覚に陥りました。

祖母の火葬からしばらく経ってしまいました。祖母の火葬も急いで行われました。このときも、祖母の顔を見て死んだことを実感するのかなを思っていたのですが、両親は私に祖父の姿を見せてはくれませんでした。ただ、棺桶を開けた瞬間の異臭にはめまいがしました。これが人の匂いなのだと考えると、言葉に表せない感情に襲われました。祖母との別れは私にとって実に悲しい出来事で、毎晩毎晩泣いていました。

ある日、祖母の知り合いから話を聞く機会がありました。その人は、祖母同様、住んでいた地域で指定された避難所に逃げた人で、避難所に津波が襲ってきたときに奇跡的に助かった人でした。当時の祖母の様子を聞いて私は言葉が出ませんでした。

祖母は揺れの後、いつもと違う事態だと判断し、自分たちが内陸に逃げるのではなく、お年寄りが多く住む周辺地域を回って、避難誘導していたのです。今までに例のない事態だからこそ、自分たちだけ逃げるのではなく、みんなのことを心配して回っていたことを知り、私は涙がでました。私は祖母が亡くなって、悲しんでばかりいましたが、その話を聞いた後は、祖母を尊敬するようになりました。

今回の震災は、たくさんものを奪っていきましましたが、私は学ぶことも多かったと思います。それは人それぞれで、正解もないと思います。私が私なりに感じたことを私自身で周りに伝えていくことが、今後の私の使命だと思っています。

体育の先生になりたい

宮城県石巻工業高等学校

三年 高橋 雅幸

僕は小学校四年生から野球を続けています。小中学生の時にはクラブチームに入っていました。中学生のときには週四日野球の練習があり、東松島市の大曲のグラウンドに父母に送られながら通っていました。僕の家は家族で水産加工業を営んでおり、住宅の隣に工場があります。

もう少しで中学校一年生が終わりという時期に、東日本大震災が発生しました。発生したときは、友達と石巻市渡波のショッピングセンターの中にいました。商品がばたばたと棚から落ち、危険を感じたので、駐車場に逃げました。アスファルトに亀裂が入って揺れている光景が今でも忘れられません。長い揺れが収まり、僕が通う万石浦中学校が避難場所になっていたのを思い出し、学校の中に入りました。先生に頼まれて、二階に上がるのが不自由な人たちの手伝いをしました。津波襲来後、校舎の周りは水浸しになってしまい、そのまま留まることにしました。水と食料が足りませんでした。

翌日の昼ころになって、父母と兄が中学校に来てくれて、家が全壊したことを知らされました。四人で家を見に行く、屋根だけが残り、下の部分はつぶれていました。工場も建物自体は残ったものの、だいぶ浸水したようでした。家の裏の山にある地域の集会所が被害を受けず残っており、地域の人たちと一緒に入ることにしました。

学校は四月中に再開されました。九月に仮設住

宅に入りました。野球については、練習場所が津波の被害を受けたうえに、がれきの集積場所にもなっていて、いつ活動が再開されるか分からない状態でした。僕は野球を続けるかどうか悩みました。悩む中にも、野球はどうしても続けたいという思いが残っているのに気づきました。

その後、石巻市の「河南中央公園」のグラウンドが借りられることになり、震災前と同じ条件で練習が再開されました。震災前と変わらず父母が送ってくれました。僕は試合にも出られるようになりました。最後の大会では、東北大会ベスト十六という成績を収めることができました。これも父母の協力があったからだと思います。

もちろん、高校でも野球を続けていこうと思っていました。進学先として石巻工業高校を選んだのは、地域の高校の中でも最強豪だと考えていたし、施設についても整っていると思ったからです。

さらには、震災一年後に二十一世紀枠で「春の甲子園」に出場したということが強く印象に残っていました。九州一の実力を有する神村学園との試合。決して引けを取らず、一時は逆転して、リードを奪いました。また、開会式での選手宣誓をした阿部翔人先輩のこと。長い宣誓文をゆくりと、堂々と語っていく姿に感銘を受けました。選手宣誓を被災地の高校がくじで引き当てることにも、運命的なものを感じました。

四月から高校球児としての生活が始まりました。放課後の練習は九時まで。ほかに朝練習もあるのですが、七時に登校していました。最初は「いぶん」と力的に「つらいものがありました」が、少しずつ慣れていきました。二年生の時にレギュラーとして定着しました。同じ学年の部員は五人と少なめなの

で、主将一人に苦勞をかけさせないように、僕たちも進んで行動するようにしていました。学習面では、考查前には野球部員が集まって「学習会」をしていましたが、この時間も大事にし、覚えるべきことはここで覚えてしまうようにしていました。高校二年生の時、新しい家が完成しました。工場も復旧がなされ、操業ができるようになりました。

高校卒業後については、体育大学に入り、保健体育科の教員を目指すことにしました。僕は身体を動かすことが好きで、スポーツ全般が得意です。好きなことで仕事ができると考えたのが、第一の理由です。そして、近年子どもたちの体力低下が指摘されているので、子どもたちが楽しく運動できる環境を整え、体を動かすことが苦手な子でも、楽しんで参加できるように授業を創り出して、体力向上を図りたいと考えたのが、第二の理由です。

震災後のこの四年半を振り返ってみて、つくづく思うのは、誰かに助けられながら、ここまで進んで来られたということです。チームメイトに助けられ、家族からも助けられて来ました。工場の再建については、ボランティアの人が助けてくれました。中でも家族からの助けが最も大きなものでした。ありがたいことだと思っています。

九月に僕は、AO入試で仙台大学の体育学部に入りました。石巻からは通えないので、一人住まいをすることになりますが、父母はこのことについても面倒を見てくれると言っています。大学では十分に体育について学び、卒業後は石巻地区に戻り、教員として働くことにより、地域にも貢献し、今まで多くの人から受けていた恩を返そうと思っています。

震災を超えて

宮城県巨理高等学校

一年 小野 ひかる

あれから四年がまたたく間に過ぎ、五年目を迎えました。いちご農家の私の家は、ビニールハウス十四棟を家族のみで震災の次年度から復興することができました。しかし、水田はまだ一粒の米も収穫することはできていません。今は家の周りも草花が生い茂っていますが、最初の一、二年は恐ろしく寂しい光景でした。津波で運ばれてきた海底の泥砂が砂漠のように真っ白に広がり、緑が一つもない荒れ果てた景色が広がっていました。息が詰まる思いでした。津波が来ていない母親の実家に行った時、庭木の緑の枝を何本か折って帰って、小さな花瓶に挿して台所に置いたら、それだけで深呼吸して落ち着くことができたのを覚えていきます。

私たちはあの時、二階から見えました。暴走列車のように、ものすごい力で流れていく巨大津波を。いつ止まるか分からない、どこまで上がってくるのか分からない。真っ黒い墨汁のような津波が一階の屋根近くまで来て止まりました。それまで私は「助けて、助けて。」と神様に祈ることしかできませんでしたが、やがて、電気のない不安な夜が来て、それまで感じたことのないものすごい静けさがかえって怖かったのを覚えていきます。それでもなんとか毛布にくるまって眠りについたのです。当時、二階にいたのは五人。母、兄二人、そして祖母と私でした。一番上の兄が地震後、家に徒歩で向かっ

ているというメールをよこし、後は連絡がつかなくなっていました。兄が家に到着して二、三分で水が来てしまいました。兄が家に到着して二、三分で水が来てしまいました。母は夜通し津波の余波を警戒し起きていました。しかも朝になったら近所の平屋に住むご夫婦が家へ避難してきていました。夜中に首まで水につかり、平屋の屋根伝いに来たそうです。次の日、消防の方達に力を借りて高台に住む伯母の家に行き、それから一ヶ月半暮らしました。小学生だった私は、しばらく自宅には連れて行ってもらえませんでした。津波の時のショックで行けなかったのです。二階で見ていたのは流れる津波だけではなく、飼っていた二匹の犬が私の見ている目の前で水にのまれて死んでしまったからです。私は大声で泣き叫ぶだけで、何もすることができませんでした。

よその家に住むことは思った以上に大変なことでした。最初はみんな気を遣ってくれましたが、やがて迷惑がられているように思いました。そうではなかったのかも知れませんが、自分自身が申し訳ないと思うからそう感じてしまったのかも知れません。

毎日、大人は津波の片付けに行き、私は伯母の家でいつもお腹がすいていました。支援物資でもらったビスケットがものすごいごちそうに思えました。今までコンビニエンスストアでなんでも好きなものを考えず食べていた頃が贅沢だったと驚きました。ティッシュペーパー一枚も勿体ないし、輪ゴム一個もレジ袋一枚も大切なものでした。着ている服も毎日同じものを着ていたし、お風呂なんて何日も入らなくても平気でした。何もかもが変

わったと思えました。普通だったことが普通ではなく、とても大切な事だったと気がつきました。毎日が寂しく、情けなく、けれどすごいスピードで過ぎていきました。

私たち家族は比較的早く家に住めるようになり、一ヶ月半後には水と電気が来たので自宅に戻り、まだあちこち直し終わっていない状態での生活が始まりました。それは今まで味わったことのない気持ちでした。新生活の始まりだと思いました。久しぶりに家族だけの食事が幸せでおいしく感じました。

東日本大震災で、家もビニールハウスも車も農機具も何もなくなってしまう大変な思いをしたのは確かですが、家族は全員無事だったし、もともと大変な状況に陥った人たちがたくさんいます。みんなそれぞれ状況は違っていますが、今でも復興に向けて頑張っています。失ったものは多いけれど、得たものもたくさんありました。ご飯をお腹いっぱい食べられる事、普通にトイレが使える事、ゆっくりお風呂に入る事、今まで当たり前すぎて全然気が付かなかったものがどれだけ幸せなことだったのか気が付くことができました。そしてそれらが自分の周りのたくさんのおかげだということも実感しました。普通であることがどれだけ幸せなのか、それと助けてくれたたくさんの人たちの気持ち、そういう事への感謝の気持ち。それはまるで人生が一度リセットされたようでした。

今はまた物があふれ、通常の生活に戻りつつありますが、あのときの気持ちをいつまでも忘れないでこれからも前へ進んでいこうと思います。そして、あの時の経験を活かして、これからまたいつ来るか分からない災害に備えながら、しっかりと生きていこうと思っています。

震災から五年目の私が考えること

宮城県多賀城高等学校

一年 瀬戸 萌々香

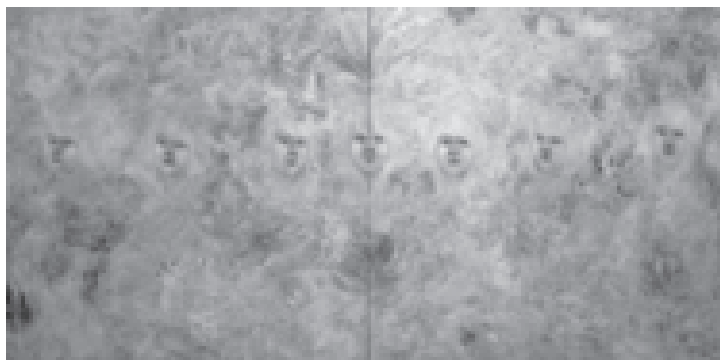
あの東日本大震災から五年が経とうとしている今、五年前の壊滅的な被害を受けた当時と比べるとかなり復興が進んでいると思います。私が住んでいる七ヶ浜も、当時は家が流され土台だけとなった土地も今では新たに家が建てられており、海で行われる祭も以前のもので変わらないう程度賑わっています。しかし、実際はまだまだ復興の途中であるのだということをきちんと頭に入れておかなければいけないと思っています。震災から五年となると当時の記憶が消えてしまいそうになります。でもそれは、私の家族は全員無事であったことや、津波の被害からも免れたからという自分中心なものです。周りを見てみると、私より遥かに辛い思いをし、今なお苦しみ、心の復興には程遠い人が多くいるのだと思うと、私は胸が痛むと共にもつと周りの人々の気持ちになって物事を考えたり感じたりしなければいけないと思いました。家を失い今も仮設住宅で生活をしている人、家族を失い辛い思いをしている人、そのような震災で大きな被害を受けた人々の少しでも力になればと最近強く思うようになりました。直接関わることは出来なくても、例えば震災のことを忘れない為に石碑を建てたり、多賀城高校が行っている津波到達点を示すプレートを貼ったりと小さなことでも何か復興の手助けをしたいです。そう強く思うようになったのは多賀城高校に入学し様々な防災に関

する講話などで、災害について知る機会が多くあり、その度にとっても興味深い話を聞くことができただので、もっとたくさん知識を蓄えおきたいと思ったのがきっかけでした。知識を蓄えておけば、五年前と同じ様な状況になった時、自分だけでなく周りの人の命を救うことが出来るかもしれないし、地域の復興にも役立てることが出来ると思います。だから、「被害を受けた人々の力になりたい。」という目標を達成する為にボランティアなどにも積極的に参加していきたいと思っています。

自分だけでなく、自分よりも辛い思いをしている立場になるということは、日常生活に置き換えると、相手の立場になって気持ちを理解してあげるといふことだと思います。相手の立場になることはとても難しいことです。やはりつい自分の事だけで精一杯になってしましますが、しかしそれはとても大事なことなのだとの辛い大震災から学びました。あまり思い出したくないの大震災ですが、そこから学び、得たものは一生忘れないし、自分にとつてかなりプラスになったのではないかと思います。例えば、震災で亡くなってしまった多くの人々の分まで精一杯生きて、この命を無駄にははいけなさと命の尊さに気付かされたり、震災当時は家に帰ることができなくて車で不安な夜を過ごしたり、水道が通っていないで十分に水を確保できなかったりと、とても大変な日々でした。だから今普通にお腹が満たされるまで食べることができたり、毎日学校へ行き勉強することができたり、そのような当たり前の毎日が幸せであるのだということも気付くことができました。

震災で辛い思いをたくさんしましたが、それと

同じ位多くの教訓を得ることができました。今後その教訓をどのように活かしていくか、社会・地域の為に震災から五年を迎える私は何が出来るかをよく考えていこうと思います。



宮城県宮城野高等学校
三年 杉 知華

失い得たもの

宮城県気仙沼高等学校

三年 小山 尚哉

私が中学一年生の時、とてもやんちゃだった私は、いつものように友達と悪ふざけをしていた。その時は、悪ふざけが過ぎてしまい放課後に先生から呼び出されて指導を受けていた。その日は、卒業式の準備等で午前授業だった為、放課したのが昼過ぎだった。私と友達は、呼び出しを受けたため職員室に向かっていた。午後から友達と遊ぶ予定があつたので憂鬱だった。職員室に入ると先生の指導を受け、反省を述べていた。呼び出された友達の一人が話し始めると、職員室が揺れた。はじめはいつもの地震だろうと思つたが、揺れが収まらない。収まるどころか、揺れはどんどん大きくなった。電気が消えた。まだ収まらない。私は「やばい」と思った。揺れは何分続いただろうか。私たちは校庭に避難した。大津波警報が鳴り響いた。校庭には、たくさん避難してきた車が押し寄せた。下校時だったため、一度帰った生徒も学校に戻ってきた。本当の恐ろしさは、これからだつた。少し時間が空いて、私は近くの高台に行つた。そこは、気仙沼を一望できる場所だつた。私はそこで自分の目を疑つた。いつも目にしてきた気仙沼の景色が、瓦礫の山に一変していた。家は流され、鉄筋コンクリートの建物の窓が破壊され浸水していた。私は家族が心配になった。父母は会社で祖母は自宅にいるはずだつた。私は一刻も早く帰宅したかつたが、一番安全だつた学校か

ら出られなかつた。三月十一日、その日は寒かつた。桜が咲く気配は全くなかつた。学校の電波時計は二時四十六分で止まつていた。日が暮れる頃には雪が降つてきた。寒くて長い夜が始まる。母がまもなく迎えにきた。無事だつた。学校から近かつた私の家では、祖母が蠟燭を一本つけて家族の帰りを待つていた。ストーブがつかないので服をありつたけ着た。余震が何度も続き眠れなかつた。父も帰つてこない。障子を閉めていたが、外が明るいことに気づいた。私と祖母は外へ出た。建物がなくなつた気仙沼の港が近く感じた。かつて水産業で栄えた気仙沼湾は火の海と化していた。流された造船所の重油が海に流出して炎を上げていたらしい。どうしてよいか分からないまま、私は眠れない長い一夜を過ごした。

翌日、私は学校へ行つた。たくさんの人々が避難していた。父も無事に帰つてきた。職場近くの高台へ逃げたらしい。私は、友達とやんちゃをしていた日常を失つた。日が経つにつれ、自衛隊の支援で生活が楽になつた。トイレ用の水をプールから運んだり、食糧の運搬など私にできることから何でもやつた。少しずつ生徒の安否が確認された。一人だけ安否が分からない人がいた。その人は、私がいつもパソコンゲームをする仲間だつた。まだ、どこかで生きていると信じていたが、数日後事実を告げられた。私は泣いた。掛け替えのない友達を奪つた、この東日本大震災の恐ろしさに憎しみを覚えた。私が仏壇の前で、彼のお婆さんから聞いた話によると、あの日、彼は学校から帰る途中だつたが、学校には戻らず、海沿いにある自宅にいる母親と愛犬が心配で家に向かつたらしい。母親は不在で、彼は犬のリードを外してか

ら避難したが、そこに大津波が押し寄せたらしい。彼の母親も間に合わなかつた。私は彼の分まで生きようと思つた。震災は瓦礫だけを残り私たちの生活のすべてを失つた。

日が経つにつれ、多くの人が支援に来て下さつた。私たちは、その人達から元気をもらつた。私はその時気づいた。普段の生活、友達、多くの大切なものを失い下を向いてばかりいた自分。しかし、私たち残された人間の使命は、亡くなつた方々の分まで生きること。私が、亡くなつた彼に誓つたように、夢を実現するために進学すること。社会の歯車として、彼の分まで頑張ろうと思う。彼は今も私の心の中に生きている。そこから私は上を向いて歩き始めた。震災を風化させてはいけない。今も戦争の語り部がいるように、私たちが経験したことを後世に伝えなければならぬ。日本だけでなく、世界からのたくさんの方々の支援で結ばれた絆。私は、生きている間この震災を伝えていこうと思つた。私は「まっすぐに自分の言葉を曲げないこと」をモットーに、中学一年の時に経験したことを、前向きに自分の道をまっすぐ歩みたいと思つた。

東日本大震災後の

自分を振り返って

宮城県登米総合産業高等学校

二年 津藤 舞

私は東日本大震災が起きたとき小学六年生でした。帰りの会が終わわり、挨拶をして廊下のワックスがけをみんなでしようとして、階段を下りて洗剤を取りに行くときでした。急に今まで感じたこともない揺れが起きたのです。びっくりしてパニックになってしまい、教室に走って戻りました。今思えば、教室に戻らず外に避難すれば良かったと思います。でもその時はびっくりしてそれどころではなかったのです。教室に走って戻ると、教室にいた友人たち、先生もびっくりしていて、みんな騒いでいました。先生が

「机の中に体を隠しなさい」と

と言ひ、私たちは近くにある机、自分の机の中に体を隠しました。揺れが収まるまでもとても怖かったです。ロッカーの上にあっただくさんのプリントが落ちてきたり、上にある暖房が机の上に落ちてきました。暖房が落ちてきた机には人が隠れていなかったから良かったものの、そこに隠れていたら、いくら机の中に隠れていても危なかったと思います。それから、揺れが収まったので外に避難しました。そして、地区ごとに集まって先生が一人つき、集団で帰ることになりました。私は地区のリーダーだったので全員いるか確かめました。地震が起こる前に車で家に帰った人などいたので、その人たちは先生から聞き、それ以外の人

たちを確かめました。そこで気がつきました。私の妹がいなかったのです。その瞬間頭が真っ白になりました。そして、周りにいた妹の同級生に聞きました。姿を見たという人もいれば、知らないという人もいました。そこで先生にすぐに伝えました。しばらくして、先生から迎えが来て帰ったことを聞かされ、安心しました。その後、みんな集まったので通学路を先生と地区の人たちと歩いて帰りました。地面は地割れしていたり、マンホールが盛り上がっていたり、今まで歩いてきた道が違っていました。雪が降ってきて寒かったのを覚えています。家に帰ると祖母と母と妹がいましました。家の中は蛍光灯が落ちていたり、食器棚が倒れていたりしました。それを見てとてもびっくりしました。そして何度も続く余震の中、少しずつ家の中を片づけました。夜には電気も水も止まってしまい使えなかったので、避難所になっていた公民館に避難をして、四日くらい過ごしました。その間もずっと電気も水も使えず不便でした。



宮城県宮城野高等学校
三年 泉 絵理子

家に帰ってからも、食べ物も何も無い状態なので朝早く起きて店に行き、寒い中並んで食べ物を買に行ったり、水をもらうために役場に並んだりしました。電気が付かないのでロウソクで明かりを付けて、火はガスだったのでそれを使いご飯を作り、家族みんなで乗り越えました。何日もたつてから電気も水も使えるようになり、すごく嬉しかったのを覚えています。あれから五年目になるなんて早いなあと思いました。震災を通してたくさん事を思いました。今まで普通に使っていた電気も水も使えなくなるどれだけ不便なのか分かり、生活するには大切なものなのだと思います。何より、地震による津波で命を落としてしまった人たちがいます。そんな事があるなんて思わず生活してきた人たち。命を大切にして生活することもあの震災を通して思いました。震災を通して電気も水も大切に、命も大切に生活していきたいと思いました。